



観光客、住人、土着民と様々な人が入り乱れる京都においてこの旗竿地の敷地の役目はなんなのだろうか。
そして、消えゆく伝統を守るために弘道館でできることとはなんなのだろうか。

そんな敷地に対する解として「内と外」の原理を導き、増築による輪の形を提案。

外を向けば

多様すぎると人は干渉せず、

ひとたび体を反転させて

内を向けば視線が交わり、

交流のきっかけが生まれる。

その視線の先に弘道館もある。

さらに「内と外」の考えを借りて、弘道館の数寄屋建築の概念を進化させる。

数寄屋建築の内面重視の考えを細かい内外の重なりによる多様な場へと進化させ、借景の概念も細やかな内外の景色の切り取りへ拡張。

数寄屋建築の本質は時代や敷地条件に呼応して、進化の如く新たな形態と解釈を手に入れる。

京都風、旗竿地の使い方